

「ワイルドライフキャンプ 2014」

★事業の概要★

事業のねらい

北海道の広大な大地と豊かで厳しい自然の中で生活体験や様々なプログラムへの挑戦をとおり、参加者に「おおらかな心」と「たくましさ」を兼ね備えた、次代を担うリーダーを育成することを目的とする。

生活体験を中心とした「自然体験」「生活体験」による参加者の人間形成を目的としたプログラム開発事業とする。

期 日

平成26年8月4日（月）～ 8月11日（月）

会 場

国立大雪青少年交流の家

対 象 者

小学校3年生～中学校3年生

参加者数：参加募集人数

26名（小学生名16名、中学生10名）：20名

講 師

国立大雪青少年交流の家職員

日 程

8/4 (月)						13:30	14:00			17:00	18:30	20:30	21:30	
						受付	開校式	森の生活(キャンプ準備)		夕食		ほっとタイム		就寝
	6:00	6:30	8:30	9:00	11:30	13:30	16:00	17:00	18:30	20:30	21:30			
8/5 (火)	起床	朝食	森の冒険Ⅰ	昼食	森の冒険Ⅱ	ピバーク準備	夕食		ほっとタイム		ビバーク体験			
	6:00	6:30	8:30	9:00	11:30	13:30	16:30	17:00	18:30	20:30	21:30			
8/6 (水)	起床	朝食	山の冒険 コース確認・目標設定	昼食	山の冒険 登山訓練	つどい	夕食	朝ごはん作り		就寝				
	6:00	6:30	8:30	11:30	16:30	17:00	18:30	20:30	21:30					
8/7 (木)	起床	朝食	燻製作り	昼食	ハイキング		夕食	登山準備		就寝				
	4:30	8:30	16:30	17:00	18:30	20:30	21:30							
8/8 (金)	起床	朝食	チャレンジ登山(富良野岳)				夕食		ほっとタイム		就寝			
	6:00	6:30	8:30	10:30	14:00	21:30								
8/9 (土)	起床	朝食	準備	スプラッシュハイク	スプラッシュ 後片付け	夕食		ほっとタイム		就寝				
	6:00	6:30	8:30	9:00	11:30	17:00	22:00							
8/10 (日)	起床	朝食	ソロ	昼食	キャンプ場撤収	ラストナイト パーティー				就寝				
	6:30	7:15	7:30	9:00	10:30	12:00	13:00							
8/11 (月)	起床	つどい	朝食	リフレクション タイム	閉会	昼食	解散							

★プログラム紹介★



「テント設営と野外炊事」

基本的な生活を全て屋外で実施。泊まる場所の設定から食事づくりも参加者が協力して行う。色々なところで、意見が分かれてもそれも経験とするのがこのキャンプの醍醐味。



「ビバーク体験」

暗い森の中で、屋外に宿泊する体験。暗闇の中の雰囲気、涙した参加者も、2日目からは、まったく気にする様子もなく、雨の中みんな熟睡。



「山の冒険」

登山に向けたレクチャーや目標設定の後、実際に足場の悪いハイキングコースでの訓練を実施。合羽を脱ぎ着するのも大切な技術であることを学ぶ。



「燻製作り」

雨が続き、活動が制限される中でも、燻製作りでは、参加者全員ハッスル。食の大切さと料理の楽しさを同時に学ぶ。



「チャレンジ登山」

不安定な天候の中、事業5日目に富良野岳登山を実施した。登山開始時は小雨が降っていたが、途中で雨が上がり、何とか全員登頂に成功した。



「スプラッシュハイク」

晴天の中、スプラッシュハイクを実施。木漏れ日が降り注ぐ森林浴とザリガニが住む清流をさかのぼる体験を満喫した。

企画・運営のポイント

長期・リスクを伴う事業の特性を踏まえ、担当者が事業に集中できるよう早い時期から所全体の体制を整えたことで、事業担当者が運営上のリスクを事前に察知できるよう踏査を十分に行うことができた。

子供たちにとって非日常の体験がキャンプ中の日常体験となるよう、生活体験を重視したプログラムとした。

事業を終えて(成果と課題)

異学年の幅を広げ、また、学年を小学校3年生までに下げることで、多くの「ナナメの関係」が生まれるとともに、体験活動自体が年齢差による協力関係などによって深められた反面、想定した時間や行程自体が大きな負担になることや、疲れによりホームシックになった参加者が出るなどした。

また、長期間の事業の中で、担当スタッフに負荷がかかることもあるため、スタッフを厚めにするなど、事業中に発生するイレギュラーに対応できる工夫が必要である。

今後の方向性

今年度は、課題も含め、大雪の情報やノウハウの蓄積として大きな意味のある事業となった。今後、今回の反省を基に準備や計画を含め、検討を行い、次年度につなげていく。また、今年度の成果を報告書としてまとめ、関係機関・団体への普及を行う。